

## 「国是」再考—神宗と王安石を中心に—

梶田祥嗣

劉向『新序』を典拠とする「国是」は皇帝と士大夫との協働統治をもとに策定された国家の最高綱領であり、宋代では熙寧三年（一〇七〇）、神宗が新法をめぐって司馬光に論弁したことを端緒とする。朱熹が指摘したように、「国是」は実質、王安石に淵源し、その後新旧両法党が政権を奪取し合う中で法度化していった。

「国是」に関する先行研究はその重要性に比して寥々としているが、そのうち余英時氏の「“国是”考」（『朱熹の歴史世界—宋代士大夫政治文化的研究』所収）は、慶暦以来の君臣協働の理想が「国是」を通じて実現される過程を描いた代表的な研究である。周知の通り、余氏の『朱熹の歴史世界』に対する反響は極めて大きく、特に朱熹の時代を「ポスト王安石」とし、朱熹が通説以上に強い政治的志向を持っていたという説をめぐって、激しい論争が繰り広げられた。しかしながら、「国是」論については表立った批判は見られず、その論説の当否はほとんど検証されていない。私見では、神宗は士大夫との協働という理想を実現するために、王安石の新法を「国是」として認めたが、実際には「国是」は新法反対者による異論を合法的に抑圧する装置として機能したのであり、君臣協働の理想とはおよそかけ離れていた。「一道德」の施策に象徴されるように、皮肉にも異論を封じるといふ点において神宗と王安石の君臣一体は実現したのである。もっとも、王安石が「国是」についてほとんど何も語っていないことから分かるように、王安石は「国是」とは別のかたちで君臣協働の実現を画策していた。それは余氏の政治文化的観点ではあまり取り上げられていない『三経義』の思想において確認することができる。

以上の論点を踏まえ、本発表では余氏の「政治文化」論を批判的に検証しながら、「国是」の発生から法度化へ至る軌跡について思想的角度から考察を試みたい。